

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02787

研究課題名(和文) 教師教育者・メンターの成長に関する研究 熟達者と新人の情感性と身体性に注目して

研究課題名(英文) Development of teacher educators and mentors in terms of the expression of their emotions and feelings

研究代表者

柳瀬 陽介 (Yanase, Yosuke)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70239820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：教師教育に関してはこれまでさまざまな検討がなされてきたが、講習の際にどのように情動・感情が身体的に共有されるかについての研究は少ない。本研究は、教師教育者・メンターの成長を、情感性(情動と感情の自覚)と身体性(情動と感情の表現)の側面から理論的に解明し分析的な記述を行った。その研究、情感性と身体性を統合する概念としての感受性は、カント以来の感性・知性・理性の三段階の枠組みで現代の諸概念も統合的に説明できること、および、すぐれた教師教育者・メンターはそのどの段階においても高い感受性の働きを示し、そのことによって受講者における意味の自己生成をコミュニケーションで育むことなどがわかった。

研究成果の概要(英文)：Teacher educators and mentors use their bodies in delicate ways to share their emotions and feelings with the course participants. However, this embodied expertise have been relatively unexamined in either theoretical or descriptive terms. This study theoretically clarified various concepts concerning the emotion and the feeling, and analyzed how some teacher educators and mentors expressed their emotions and feelings and shared them with their participants. We found that the classical three stage notion by Kant of sensibility, understanding, and reason is still a useful framework for contemporary concepts regarding emotions and feelings, and that experienced teacher educators and mentors show high level of sensitivity in each of the three stage and promote the autopoiesis of communication (hence, meaning) among their participants.

研究分野：英語教育学

キーワード：教師教育 メンタリング 身体 情動 感情

### 1. 研究開始当初の背景

教師教育に関してはこれまで教育方法や教育内容についての講習などのさまざまな試みがなされてきたが、主に注目されていたのは伝授される教育方法や教育講習の内容であり、講習の際に教師教育者(あるいはメンター)がどのように振る舞っているかについてはその重要性が直感的には理解されていても、その理論的解明は十分であったとは言えない。しかし、教師教育者・メンターが成長を必要とする教師(受講者・メンティー)に対してどのように感情を共有したそのことを身体作法で表現するかは教師の成長にとって大きな役割を果たしているのではないかという私たちの直感が正しいなら、そのことは理論的に解明され教師教育者・メンターが十分に自覚しておくべきこととなる。教師教育者・メンターが関わる受講者・メンティーの数の多さを考えるなら、教師教育者・メンターのもつ身体性と情感性に着目し、適切な教師教育のあり方について考察することは重要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、教師教育者・メンターの成長を、情感性(情動と感情の自覚)と身体性(情動と感情の表現)の二つの側面から理論的に解明し分析的な記述を行うことを目的とした。情感性という概念は、意識されないが感情や思考の基盤となる情動(emotion)と意識の中核をなす感情(feeling)の二つを指している。身体性は、その情感性をいかに抑圧せずに自然に表明できるかを指している。どの教育内容や教育方法を伝授するかというWHATの問題よりも、どのように情感性と身体性にみちた伝授をするかというHOWの問題に着目したのがこの研究である。

### 3. 研究の方法

研究は、理論班・熟達者観察班・新人観察班の三つのグループに分けて行った。理論班は、情感性と身体性に関する諸概念を教育の現場に合わせた形で理論的に整理した。熟達者観察班は、教師教育・メンタリングに長年の経験をもつ者を、新人観察班は教師教育者・メンターとしての経験の浅い者を観察した。最後にこれら三つのグループの知見を統合して論文として公表した。

### 4. 研究成果

熟達者観察者班は三名の熟達者について、教師教育・メンタリングの現場を観察しさらにインタビューを行った。うち、一名については公開ワークショップ・シンポジウムの場を開き、本科研メンバーだけではなく、広く教師教育あるいは情感性や身体性に興味をもつ者にも観察と分析と議論の場を与えた。新人観察班は某地方自治体の教育センターと信頼関係を結び、二年間にわたり、教師教育・メンタリングの場を観察し適宜インタビ

ューも行って分析を進めた。その成果は出版物では四本の学会誌査読付き論文、一本の報告書論文で公表したが、その概要をまとめると以下ようになる。

知性に傾斜しがちな現代の英語教育において、本研究は感性に関する諸概念(感性、知性、理性、「からだ」(情動)、「こころ」(感情・中核意識)、「あたま」(拡張意識) 想い、言語、感受性、情動共鳴、自己生成)を理論的に整理し、優れた教師教育者の言動をそれらの概念から総括的に分析し、以下の知見を得た。(1) 本研究が対象とした三名の優れた英語教師教育者は、それぞれに高い感受性を有していたが、それは感性のみならず知性や理性に対しても働く感受性であった。(2) 三名は、「からだ」(情動)の水準での学習者への働きかけを重視し、そこから生じる情動共鳴で学習者の「こころ」(感情・中核意識)を学びに集中させ、それぞれの学習者にそれぞれの想いを育ませていた。(3) 情動共鳴をおこす学習者は想いを表明し互いの想いに反応する中で、コミュニケーションを自己生成させた。自己生成するコミュニケーションは、時に誰もが予想しなかった発展をとげた。(4) 三名はそういったコミュニケーションの創造性をもたらす思いがけない学習者の成長を実践の喜びとしていた。

これらのコミュニケーションの基盤は言うまでも意味であるが、この意味概念に関しても本研究は理論的な分析を行った。近代社会に組み込まれた意味の通説である客観主義者の意味論は、意味を「客観的に記述できる確定的で静態的な対象」としてとらえている。だが、神経科学における意識の統合情報理論をルーマンの意味理論で補うことによって本研究が提示した新しい意味概念は、意味を「客観的に記述できる物理機構における動態的過程から生じる主観的経験であり、そこには現実性の確定性と可能性の不確定性が統一的に共存している」と説明する。この意味概念を三点に整理しなおせば次のように意味を説明できる。

(1) 意味の客観性と主観性：意味は、客観的実在物上での主観的経験である。

(2) 意味の確定性と不確定性：意味の経験では、現実性の確定性と可能性の不確定性が統一的に共存している。

(3) 意味の動態性：意味は、動態的過程として常に連動的に発展する。

この新しい意味概念からすれば、英語表現の意味は、「理解者の自己生成として主観的に経験されること」となるだろう。意味は理解者の内的な「見通し」の変化として主観的に実感される。その「見通し」は不確定的な可能性を含んだものとして動態的に現れる。ある「見通し」から浮き上がってきた可能性を現実性の高いものとして考え始めるにつれ、別の見通しが連動的に次々と現れるため、意味による意識の自己生成、つまりは「見通し」の変化を静態的に確定することはできない。

い。

ここから明らかになることは、言語表現の意味理解は、一元的でなく多元的になされることである。ある発言の意味は、一人で吟味する場合でも複数の視点・観点から吟味されるし、多くの場合はその発言に接した複数の人間の語り合いによってさらに多くの視点・観点から吟味される。意味理解が一義的に定まるのは、ビジネスの発注書などの定型的発言だけであり、経済活動の場でも政治活動の場でも社交の場でも文芸の場でも、一つの発言は多くの可能性を帯びたものとして現れ、その意味は不確定性と動態性を帯びながら各人の意識の中で主観的に経験される。その不確定的・動的・主観的な意味理解の妥当性を検討するのは、アレントが言うように、複数の人々に開かれた場での対等な語り合いである。

だが客観テストの導入ばかりに熱心な現状の英語教育を見る限り、こういった多元的な意味理解についての自覚がますます薄くなっているようである。そこで本研究は、客観性概念についても理論的検討を加えた。西洋哲学の深い素養に基づきながら現代社会について考察したアレントやルーマンといった20世紀後半の研究者が使用する客観性に関する概念は、社会構成主義に基づいて私たちが社会的に(=複数の視点と観点が共存する状況で)とらえる客観性を表現している。これを「多元的客観性」と呼ぶならば、この多元的客観性は、理念的に規定できるものの現実世界で私たちが実現できない一元的客観性とは異なり、「特定の立場にとらわれず、物事を見たり考えたりするさま」という「客観的」の第二通義による現実的な客観性を示している。本研究では多元的客観性を、アレントの「現実」概念とルーマンの「二次観察」概念から特徴づけて、現代想定されている「一元的客観性」と対比させた。

こうして客観性概念を多元性に基いてとらえなおすと、教師教育とメンタリングの根幹である対話についての理解も新たになってくる。本研究ではさらにボームの対話論に基づきながら、対話を意味と真理の概念から再構成し、対話を以下の六つの命題によって説明した。(1) 対話とは、意味の連動性を通じて真理を追求する協働的な思考である。(2) 意味は連動性を生み出す。(3) 意味をまとめあげるのは感受性であり、感受性が高まれば「一つの身体、一つの心」が生じうる。(4) 真理は到達できない理念として対話を導く。(5) 真理に到達できない対話者にとって重要なのは、決めつけないことである。(6) 感受性を高め、互いに決めつけない方針を貫く対話は、新たな思考を創造する。

このように本研究は、理論的分析により感性に関する諸概念(感性、知性、理性、情動、感情・中核意識、拡張意識、想い、言語、感受性、情動共鳴、自己生成)および言語教育の基礎概念(意味、客観性、対話)を明確に

整理し、それらの整理された概念によってすぐれた教師教育者・メンターが示す言動を解明した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 柳瀬陽介 (2018b). 意識の統合情報理論からの基礎的意味理論 英語教育における意味の矮小化に抗して 『中国地区英語教育学会研究紀要』 48, 53-62. 査読あり

(2) 柳瀬陽介 (2018a). 優れた英語教師教育者における感受性の働き 情動共鳴によるコミュニケーションの自己生成 『中国地区英語教育学会研究紀要』 48, 11-22. 査読あり

(3) 柳瀬陽介 (2017c). 意味と真理の概念から捉えた対話の概念 広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書「異教科で協働できる教員を育成するための実践的研究(1)」 pp. 64-70. 査読なし

(4) 柳瀬陽介 (2017b). 英語教育実践支援研究に客観性と再現性を求めることについて 『中国地区英語教育学会研究紀要』 48, 83-93. 査読あり

(5) 柳瀬陽介 (2017a). 意味、複合性、そして応用言語学 『明海大学大学院応用言語学研究紀要 応用言語学研究』 19, 7-17. 査読あり

〔学会発表〕(計6件)

(1) 柳瀬陽介 (2018c). なぜ物語は実践研究にとって重要なのか. 言語文化教育研究学会

(2) 柳瀬陽介 (2018b). 意識の統合情報理論からの基礎的意味理論 英語教育における意味の矮小化に抗して 中国地区英語教育学会

(3) 柳瀬陽介 (2018a). 優れた英語教師教育者における感受性の働き 情動共鳴によるコミュニケーションの自己生成 中国地区英語教育学会

(4) 柳瀬陽介 (2017c). 言語学という基盤を問い直す応用言語学? 意味概念を複合性・複数性・身体性から再検討することを通じて 明海大学応用言語学セミナー

(5) 柳瀬陽介 (2017b). 英語教育実践支援研究に客観性と再現性を求めることについて 全国英語教育学会

(6) 柳瀬陽介 (2017a). 英語教育の基盤としての感性についての理論的整理 中国地区英語教育学会

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

「英語教育の哲学的探究 2」には本科研に関する知見がまとまるごとに細かく中間報告を公表した。関連記事は 3 年間で 41 本になる。

<http://yanaseyosuke.blogspot.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

柳瀬 陽介 (YANASE, Yosuke)  
広島大学・教育学研究科・教授  
研究者番号：70239820

### (2) 研究分担者

吉田 達弘 (YOSHIDA, Tatsuhiro)  
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授  
研究者番号：10240293

玉井 健 (TAMAI, Ken)  
神戸市外国語大学・外国語学部・教授  
研究者番号：20259641

長嶺 寿宣 (NAGAMINE, Toshinobu)  
熊本大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20390544

榎葉 みつ子 (KASHIBA, Mitsuko)  
広島大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：20582232

田尻 悟郎 (TAJIRI, Goro)  
関西大学・外国語学部・教授  
研究者番号：30454599

横溝 紳一郎 (YOKOMIZO, Shin'ichiro)  
西南女学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：60220563

山本 玲子  
京都外国語短期大学・キャリア英語科・准教授

研究者番号：60637031

今井 裕之 (IMAI, Hiroyuki)  
関西大学・外国語学部・教授  
研究者番号：80247759

(3) 連携研究者 ( )

(4) 研究協力者 ( )